

集結が決まったが、風邪で発熱、荷造りする気力もない。今度の便船に乗れない者は最終便になると聞かされ、やっとの思いで荷造りをした。荷物は一世帯ふとん袋一個、身まわり品の行李一個と限定。新しい物は駄目、金、銀製品等高価な物も駄目、金は一銭も持つことは許されない。違反者が出れば、全員最終便になると厳しい達しである。広場集結後厳重な荷物検査があり、三十日夕刻引揚船に乗船、三十一日朝出港、ジグザグ航行の末、廃虚のような鹿児島港に入港したのは四月三日夕刻であった。

外地引揚者の思い出

沖縄県 高本正宣

昭和二十年八月十五日正午、私達は中国広東市の野戦郵便局で、終戦詔勅の放送を聞き、日本の敗戦を知りました。生涯忘れることのできない、大変な衝撃でありました。そのとき今後どう生きて行くのかと大き

な不安がさき走った。

八月十三日、従妹より一通のハガキを受取って見ると、台湾台北市に住んでいる家族は、皆元気ではあるが、お金に困っているとのことで、敗戦三日前のこのハガキを局長、課長に見せて、私の一年間の貯金した通帳を台北の妻あて送らせて下さいとお願いしたらすぐ許可になりました。

それで数日間考えに考えたあげく、八月十八日の便で台北に送りました。ところがこの郵便物が届いたのはかなり時間がかかったらしい。妻たちは台北もはげしい空襲で天母温泉地区にもおれず、台中市の西北の農村地区に疎開していて、終戦となったので台北市の我が家に引揚げる途中に、道路で台北郵便局員に出会い、書留郵便物を受取り、開封して見たら、たくさんのお金が貯金されている通帳であったので、大変喜んだということがあります。そのことは約一か年後、私が昭和二十一年九月十八日日本土経由で八重山に帰って初めて聞いた話でありました。

私たちの部隊は、昭和二十一年四月十一日の夕方、

広東市の南数十キロの黄埔の港町で一夜を過ごして、四月十二日、アメリカのリバティ引揚船（約八千トン級）に乗るため午後より団平船に引かれて更に数時間南下しました。夜中の午前一時頃、約二千人の軍人軍属が胸に引揚番号を書いた札をアメリカの係軍人が調べて船内に入れていました。私共が乗ったのは翌日の明け方で、朝出港しました。

ところが航海中にコレラが発生、十一人も死亡しました。一日に死者二人出た時もありました。毛布で死者を包んで、数百人の乗船者が船の甲板上に集合して手を合わせ、その附近を二回り、ご冥福を祈り、海中に葬りました。

数日後台湾の最南端のガランピ灯台が見えたので、生涯の見おさめとして甲板に出て、約一里沖より別れを告げて船室に戻りました。その翌日島が見えたので船員に聞いたところ宮古島とのことで、沖縄県人はそこで下船させて欲しいと云ったが、コレラの人を乗せているのでだめとのこと。四月二十四日朝浦賀港に入港しました。

然し上陸もできず、海上で検疫をくり返し、五月三日久里浜に上陸、アメリカ軍の検査を経て五月二十三日浦賀の馬堀援護所に宿泊、五月二十四日浦賀駅より沖縄県部隊は復員となり、鹿児島までの切符一枚を貰いました。ところが沖縄県庁が福岡博多駅近くにあると隊長から聞き、五月二十五日朝、博多の欽修寮沖縄県人収容所に到着しました。

それから三か月、博多を出発して鹿児島に行く間は、私達八重山出身者は、アメリカ軍の飛行場の雑務に使用されました。その頃八重山では天然痘が発生しているため、八重山行きはアメリカ軍が許可しなかったのです。二十一年六月頃、私が家族宛に出したハガキは、二か月後に届いた事を帰島して知りました。

福岡を出発したのは昭和二十一年八月三十日、夕方鹿児島島の引揚者収容所に着き、九月十四日鹿児島港出港、九月十八日石垣港着、なんとか無事に帰宅致しました。終戦一年一か月後ようやくなつかしい我が家に帰りついたわけでありませう。その間の労苦はどうてい言葉や文章ではつくし難いものがあります。

台中にいた妻はカッケにかけ、台中の農村地帯の人々のご好意で医師を呼んで頂き、元氣になり、無事に帰郷することができました。私と妻は終戦二十四年頃と数年前の二回当時の人々のご厚情忘れ難く、御礼のためお世話になった方々とお会いしてきました。そのとき台湾の新聞記者会見もして報道され、その新聞をおみやげに今日まで大事に記念に保存致しております。

光陰矢の如く苦難の九十年

福島県 佐藤 シイ

私は大正十年、郡山市小原田町の農家の二男と結婚し、一男一女を産んだ。夫は当時の国有鉄道に勤務し、謹厳実直、酒もたばこのまず、真面目に勤務していた。趣味といえば、サツキの盆栽いじりで、子供も可愛がり、何もいうことのない理想的な旦那様でした。

夫の実家も私の実家も農業を手広くやっております、私

は農作業を手伝い、毎日幼な子をかかえ、朝は早くから遅くまで汗水流して働いた。分家することになり、両親の若干の援助と、それまで貯えた金を出し、市内に土地と古い一軒建の家を買い、親元を離れ独立した。石垣を積んだり、庭木や大きな石を入れたり、家を補修したりで、貯金もつかい果したが、夫は見栄をはり、つぎつぎといろいろな物を買いかんだ。三十歳を過ぎ、独立して親の目の届かない生活となった途端、これまでの生活態度から想像も出来ないように人が変わってしまった。

毎晩毎晩酒を飲み歩き、友達の飲み代も、自分が持ち、月給もほとんど家に入れない状況になった。それに敷地内に借家を新築し、その家賃で収入を得ようとしたが、そんなことも家計の足しにはならなかった。子供達も大きくなり、長女は高等女学校四年、長男は旧制中学一年となり、教育費もかかり、ニッチもサッチも行かなくなってしまった。

そこで借金返済のため、国鉄を退職し、その退職金で返済し、当時大陸鉄道の職員募集に応募し、子供二